

165
57

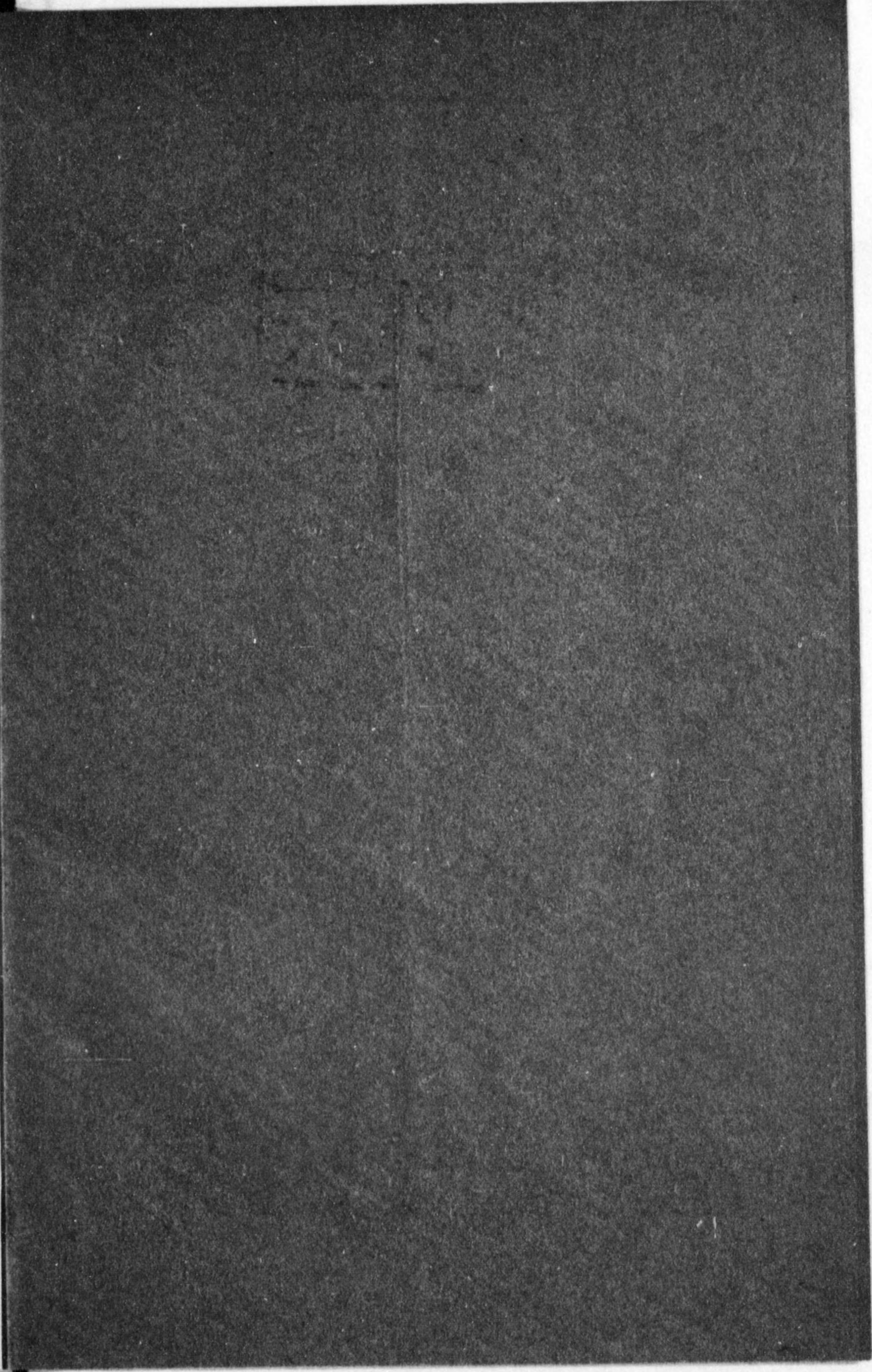
立正安國論

特45
189



府起

平樂
不為



佛記

明治甲午一月吉業度書

優波塞日謙



立正安國論訓譯讀本序

高祖大聖甚深法門。一期之所詮。觀心本尊鈔。及此論也矣。本尊鈔則骨。此論則肉。本尊鈔則身。此論則心。而骨肉身心互相關係。然本尊鈔述義深邃。人窺太稀矣。此論則創業之基本。高祖一期之身行。相繇相發。則是一宗開導之標式也矣。是以古來繙讀傳持亦隨多。然論文雅妙。義意隱顯。婦幼乃艱。大慈利物之旨。弘攝普

佛記

明治甲午一月吉業度書

優婆塞日謙



立正安國論訓譯讀本序

高祖大聖甚深法門。一期之所詮。觀心本尊鈔。及此論也矣。本尊鈔則骨。此論則肉。本尊鈔則身。此論則心。而骨肉身心互相關係。然本尊鈔述義深邃。人窺太稀矣。此論則創業之基本。高祖一期之身行。相繇相發。則是一宗開導之標式也矣。是以古來繙讀傳持亦隨多。然論文雅妙。義意隱顯。婦幼乃艱。大慈利物之旨。弘攝普

潤之教。智愚何隔。故今訓譯以和。傳持以廣。迺
斯佛祖普潤之意耳。三根兩機法益一齊。廣宣
流布四海同歸。是其願也。

維時大日本明治二十七年春日 祖訓上奏之翌月

建宗佳節點香淨手欣然而序

師子王學人 智學居士 和南拜艸

本書要例

本論ハ宗門創業ノ大本、憲府諫曉ノ靈策ナルヲ以テ、高祖嘗テ數々自ラ轉寫弘布シタマヒ、且ツ自ラ講談シ
タマヘル事サヘアリタリキ。故ニ末代ノ今日ニ於テモ、門下ノ最要典ト爲シ、人々必ズ傳持拜讀シテ、以テ
自行化他ノ元樞トスベキコト勿論ナリ。

輒近、魔論内外ニ出沒シ、本論ヲ妄評シテ、無實ト矯メ、妖書ト誣ユ。或ハ世學ノ門ヨリシ、或ハ佛子ノ口
ニ藉リ、縱橫其魔力ヲ張ル。顧フニ天ヨク砥礪ヲ下ダシテ、茲眞光ヲ促スモノカ。

本會ハ夙トニ立正安國ヲ以テ名トス、大義ヲシテ名分ニ愜ハシメントナリ。而カモ立正安國論ハ、即チ宗門
凡百ノ義分教行ヲ包括シ、高祖一期ノ議論ト事業トヲ代表ス。故ニ本尊抄ト本論トハ、義意、骨肉、身心、
體用、相容レ相攝シテ、ヨク妙宗ノ教體ヲ組織ス。彼内外六十五卷ハ、乃チ此一抄ノ援證ナリ、説明ナ
リ。斯ノ如ク解シ得テ、宗乘始メテ議スベシ。妙宗ノ徒タランモノ、先ヅ本論ヲ讀ミテマツルベキコト、
多言ヲ要セザルナリ。

古來、本論ノ爲ニ別ニ注疏ヲ作り、或ハ別ニ刊行シ、間マダ和譯抄解セルモノ等多シ。殊ニ許多ノ注家、苟
モ祖典ヲ釋スルモノ、皆先ツ力ヲ本論ニ致サルハナシ。健記、朝記、御書註、扶老、拾遺、語記、語式等
ソノ特ニ本論ヲ疏シタルモノヲ、遠疏、見心抄、新註、等ト爲ス。其他俗解抄譯ノ短篇、新古雜出枚舉ニ遑
アラズ。或ハ典據故實ヲ註シ、或ハ義例義判ヲ叙シ、或ハ法門ノ深義ヲ指導スル等、古人ノ勉強實ニ欽慕ス
ベシ。然レドモ猶未ダ盡ク後世ヲ満足セシムルニ至ラズ。予不敏、其力ナシトイヘドモ、信仰ノ精氣自ラ禁
セズ、比年刻苦勵精シテ、大ニ宗義ヲ發揚セントシ、自ラ乏資ヲ割キテ、古典數千卷ヲ購得シ。群書堆中、

今や腹稿將サニ熟セントス。幸ニ天コノ可憐ノ孤客ニ假スニ年命ヲ以テセンコト希フノミ。然レモコレナホ長年ノ大計ナリ。故コ今マ先ツ假リニコノ讀本ヲ製シテ、廣ク衆人閱讀ノ便ヲ與フ。一文不通ノ婦幼ニ至ルマデモ咸ク高祖大慈ノ訓化ニ浴セシムルノ方便ハ、吾人ノ一日モ忽ニスベカラザルモノナレバナリ。然ルニ此訓譯讀本、モト無文字ノ人ヲ票準トシテ之ヲ製ス、句讀譯義必シモ拘泥セズ、假名遣モ亦一往ニ順フ、他日ノ再三版ヲ期ス。

今茲三月九日、兩陛下大婚廿五年ノ大慶典ヲ舉行シタマヒ、詔シテ民ト與ニ祝シタマフ。依テ全國本會々員一同ヨリ、予ガ明治十九年ノ撰述ニ係レル佛教夫婦論ヲ献上シテ、天覽ニ供シ奉ル。獻本ト此大慶典ト事理相應シタルコト誠ニ千載ノ一遇ト謂フベシ。而シテ其論ズル所ロハ、即チ本論立正安國ノ精要ヲ活釋シタルモノ、今ヤ無上ノ慶祥ニ縁セラレ、夫婦論ノ名ヲ假リテ、九重ノ上ニ紹介セラル、廣宣流布ノ瑞兆、豈コレニ過ギンヤ。加之別ニ獻本ノ微意ヲ説テ、特ニ吾高祖經營ノ梗概ヲ上奏シ奉ルヲ得タルハ、益々法門ノ大祥ナルヲ證知スルニ足ル。依テ今高祖大聖報恩ノ爲メ、妻疏ヲ冊尾ニ附記シテ、讀者ヲシテ護法忠君ノ志ヲ増益セシメ、以テ本論ノ圓滿解行ニ資スト云フ。

本書第一版ハ、大阪ナル會員紀仲姓ノ賞刻ニ係ル。望ムヲクハ一覽ノ人、唱題一遍以テ正義ノ普及ヲ祈リテ所志ノ靈ニ酬ヒヨ。

立正安國會々頭智學居士田中巴之助虔誌

訓譯讀本 立正安國論

本朝 日蓮大菩薩御撰

御門人 田中智學訓譯
御門人 紀仲梅三郎賞刻



大文十段アリ
▲第一段 災難ノ由來才明ネ
●利劍即是ノ文ハ善導が般若講ニ在リ
●衆病悉除ハ本願經御經ノ第七願ノ文ヲ指シ
●病即消滅ハ法華經蓮華講ノ文
●七難即滅 云々ハ仁王般若經受持品ノ文、又百座百講ノ儀ハ同經護國品ニ在リ
●五瓶の水ノ事ハ大日經疏四及び尊勝軌等に
に出フ

旅客、來て嘆いて曰く。近年より近日に至るまで、天變地天飢饉疫癘、遍く天下に滿ち廣く地上に迸る、牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり、死を招くの輩すで大半は超へ、之を悲まざる族敢て一人もな。然る間、或は利劍即是の文を専らとして、西土教主の名を唱へ。或は衆病悉除の願を恃で、東方如來の經を誦し。或は病即消滅不老不死の詞を仰で、法華眞實の妙文を崇め。或は七難即滅七福即生の句を信じて、百座百講の儀を調へ。あるは秘密眞言の教に因て、五瓶の水を灑ぎ。あるは坐禪入定の儀を全ふして、空觀の月を澄まし。若

●七鬼神 却盧神呪經
 に出づ、夢多難、阿伽
 尼、尼伽尸、阿伽耶、波
 羅尼、阿毘羅、婆提利、
 の七鬼神是也
 ●五大力 仁王經受持
 品に出づ、金剛吼、龍王
 吼、無畏十力、雷電吼、
 無量力吼、の五菩薩是
 也
 ●四角四境 東鑑三十
 及び公事根源下、延喜
 式一、等に出づ、又、道
 鑿の祭とも云ふ
 ●德政 論語云爲政
 以徳
 ●二離 日月なり、周
 易、前漢書、本朝文籍等
 に出づ
 ●五緯 五星也、彗星
 彗星、太白星、鎮星、
 辰星、是也
 ●三寶 佛、法、僧、
 ●百王 云々ハ愚童訓

くは七鬼神の號を書いて千門一押し。若くは五大力の形を圖して萬
 戸一懸け。若くは天神地祇を拜して、四角四境の祭祀を企て。若く
 ハ萬民百姓を哀んで、國主國宰の德政を行ふ。然りと雖ども唯肝膽
 を摧くのみにして、彌飢疫に逼る。乞客目に溢れ死人眼に滿てり。
 屍を臥して觀と爲し、尸を並べて橋と作す。觀れば夫れ、二離壁
 を合せ、五緯珠を連ね。三寶世一在り、百王未だ窮らざるよ、此世
 早く衰へ、其法何を廢れたる。是何なる禍に依り、是何なる誤に由
 るや。

主人の曰く。獨此事を愁へて、胸臆に憤悲す。客來て共に嘆く。屢
 談話を致さん。夫れ出家して道に入る者ハ、法に依て佛を期するな
 り。而るに今神術も協はせ、佛威も驗なし。具に當世の體を觀るに

に出づ
 ●圓覆 天也
 ●方載 地也

●覺鬼 止觀入云鬼但
 病レ身、殺レ身、覺則破
 二觀心一破三法身慧命一
 起二邪想一、奪二人功
 徳一、與レ鬼爲レ異

▲第二段 災難ノ
 證據ヲ明ス

●蘭室 孔子家語云與
 二善人一居、如レ入二芝
 蘭之室一久而自芳云々
 ●金光明經 唐譯金光
 明母勝王經第六天王
 護國品の文也

愚にして後生の疑を發す。然れば、則、圓覆に仰いで恨を呑み、方
 載に俯して慮を深うす。情微管を傾け、聊る經文を披きたるに。
 世皆正に背き人悉く惡に歸す。故に善神は國を捨て相ひ去り、聖人
 ハ所を辭して還らせ。是を以て魔來り鬼來て災起り難起る。言はせ
 んバあるべからず。恐れんばあるべからず。
 客の曰く。天下の災、國中の難、余獨嘆くのみにあらず、衆皆悲め
 り。今蘭室に入て、初て芳詞を承はるに、神聖去り辭し災難並び起
 るとハ、何れの經に出たる哉、其證據を聞かん。
 主人の曰く。其文繁多にして、其證弘博なり。金光明經に云く。其
 國土ニ於テ、此經アリト雖ドモ、未ダ嘗テ流布セズ。捨離ノ心ヲ生
 シテ、聽聞センコトヲ樂ハズ。亦供養シ、尊重シ、讚歎セズ。四部

●四王、持國、增長、廣目、多聞、の四天に於て、皆帝釋天所屬の天也

ノ衆持經ノ人ヲ見テモ、亦復尊重シ乃至供養スルコト能ハズ。遂ニ我等及ビ餘ノ眷屬無量ノ諸天ヲシテ、此甚深ノ妙法ヲ聞クコトヲ得ズ、甘露ノ味ニ背キ、正法ノ流ヲ失ヒ、威光及以勢力有ルコト無カラシム。惡趣ヲ增長シ、人天ヲ損滅シ、生死ノ河ニ墜テ、涅槃ノ路ニ乖カン。世尊、我等四王、并ニ諸ノ眷屬、及ビ藥叉等、斯ノ如キノ事ヲ見テ其國土ヲ捨テ擁護ノ心無ケン。但我等ノミ是王ヲ捨棄スルニ非ズ。亦無量ノ國土ヲ守護スル諸大善神有ンモ、皆悉ク捨去セン。既ニ捨離シ已リナバ、其國ニ當ニ種々ノ災禍有テ、國位ヲ喪失スベシ。一切ノ人衆皆善心無ク、唯繫縛殺害嗔諍ノミ有テ、互ニ相ヒ讒譖シテ枉ゲテ無辜ニ及ボサン。疫病流行シ。彗星數出デ。兩ツノ日竝ビ現シ。薄蝕恒無ク。黑白ノ二ツノ虹不祥ノ相ヲ表ハン

●大集經 障壽大集月藏經第十法滅盡品の文也

星流レ、地動イテ、井ノ内ニ聲ヲ發サン。暴雨惡風時節ニ依ラズ。常ニ飢饉ニ遭フテ苗實モ成ラズ。多ク他方ノ怨賊有テ、國內ヲ侵掠セシ。人民諸ノ苦惱ヲ受ケテ、土地トシテ可樂ノ處有ルコト無ケン。上大集經に云ク。佛法實ニ隱沒セバ、鬚髮爪皆長ク、諸法マダ忘失セシ。當時ニ虚空ノ中ニ大ナル聲アツテ地ヲ震ヒ、一切皆遍動センコト、猶水上輪ノ如クナラン。城壁破レ落テ下リ、屋宇悉ク圯レ折ケ樹林根枝葉華葉果藥盡キン。唯淨居天ヲ除イテ、欲界ノ一切處ノ七味三精氣損滅シテ餘アルコト無ケン。解脱ノ諸ノ善論、當時ニ一切盡キン。所生ノ華果ノ味希少ニシテ亦美カラズ。諸有ノ井泉池モ、一切盡ク枯涸シ。土地悉ク鹹鹵シ、剖裂シテ丘澗ト成ラン。諸山皆焦然トシテ天龍モ雨ヲ降サズ。苗稼皆枯死シ、生ズル者皆死レ盡キ、

餘草更ニ生ゼズ。土ヲ雨シテ皆昏闇ニ。日月モ明ヲ現ゼズ。四方皆
 亢旱シテ、數諸ノ惡瑞ヲ現ゼン。十不善業道、貪瞋癡倍增シテ、衆
 生交母ニ於テ之ヲ觀ルコト獐鹿ノ如クナラン。衆生及ビ壽命色力威
 樂減シ、人天ノ樂ヲ遠離シテ皆悉ク惡道ニ墮セン。是ノ如キ不善業
 ノ惡王ト惡比丘ト、我正法ヲ毀壞シ天人ノ道ヲ損減ス。諸天善神王
 ノ衆生ヲ悲愍センモノ、此濁惡ノ國ヲ棄テ皆悉ク餘方ニ向ハン。已
 仁王經云く。國土亂レン時ハ、先鬼神亂ル。鬼神亂ル、ガ故ニ、
 萬民亂ル。賊來テ國ヲ劫カシ、百姓亡喪シ、臣君太子王子百官共ニ
 是非ヲ生ゼン。天地恠異シ。二十八宿星道日月時ヲ失ヒ度ヲ失ヒ。
 多ク賊起ルコト有ラン。又云く。我今五眼ヲモツテ、明カニ三世ヲ
 見ルニ。一切ノ國王ハ、皆過去ノ世ニ五百ノ佛ニ侍ルニ由テ、帝王

●仁王經 秦壽仁王般
 若經隨國品の文也

●藥師經 非壽藥師經
 の文也

主ト爲ルコトヲ得タリ。是ヲ爲テ一切ノ聖人羅漢、而モ爲ニ彼國土
 ノ中ニ來生シテ大利益ヲ作サン。若シ王ノ福盡キン時ニハ、一切ノ
 聖人皆爲ニ捨去セン。若シ一切ノ聖人去ル時ハ七難必ズ起ラン。已
 藥師經云く。若シ刹帝利、灌頂王等ノ災難起ラン時ニハ、所謂人
 衆疾疫ノ難、他國侵逼ノ難、自界叛逆ノ難、星宿變恠ノ難、日月薄
 蝕ノ難、非時風雨ノ難、過時不雨ノ難アリ。已仁王經云く。大王
 吾今化スル所ハ、百億ノ須彌百億ノ日月アリ。一一ノ須彌ニ、四天
 下有リ。其南閻浮提ニ十六ノ大國、五百ノ中國、十千ノ小國アリ。
 其國土ノ中ニ七ツノ長ルベキノ難アリ。一切ノ國王是ヲ難ト爲スガ
 故ニ。云何ナルヲカ難トナス。日月度ヲ失ヒ、時節反逆シ、或ハ赤
 日出デ、黒日出デ、二三四五ノ日出デ、或ハ日蝕シテ光ナク、或ハ

日輪一重二三四五重輪ニ現ズルヲ、一ノ難ト爲ス也。二十八宿度ヲ失ヒ、金星、彗星、輪星、鬼星、火星、水星、風星、刁星、南斗、北斗、五鎮ノ大星、一切ノ國主星、三公星、百官星、是ノ如キノ諸星各々ニ變現スルヲ二ノ難ト爲ス也。大火國ヲ燒キ、萬姓燒ケ盡キ或ハ鬼火、龍火、天火、山神火、人火、樹木火、賊火、是ノ如ク變恠スルヲ三ノ難ト爲ス也。大水百姓ヲ漂没シ、時節反逆シ、冬雨フリ、夏雪フリ、冬ノ時ニ雷電霹靂シ、六月ニ冰霜雹ヲ雨ラシ、赤水、黑水、青水ヲ雨ラシ、土山、石山ヲ雨ラシ、沙磧石ヲ雨ラシ、江河逆ニ流レ、山ヲ浮ベ、石ヲ流ス、是ノ如ク變ズル時ヲ四ノ難ト爲ス也。大風萬姓ヲ吹キ殺シ、國土山河樹木一時ニ滅没セン、非時ノ大風、黑風、赤風、青風、天風、地風、火風、水風是ノ如ク變ズルヲ

●大集經 第二十五處
空目分諸法品の文

五ノ難ト爲ス也。天地國土亢陽シ、炎火洞然トシテ、百草亢旱シ、五穀登ラズ。土地赫然トシテ、萬姓滅盡セン。是ノ如ク變ズル時ヲ六ノ難ト爲ス也。四方ノ賊來テ國ヲ侵シ、内外ノ賊起ラン、火賊、水賊、風賊、鬼賊アツテ百姓荒亂シ、刀兵劫起セン。是ノ如ク恠スル時ヲ七ノ難ト爲ス也。上大集經に云く。若シ國王有テ、無量世ニ於テ施戒慧ヲ修ストモ、我法ノ滅センヲ見テ捨テ擁護セズンバ、是ノ如ク種ル所ノ無量ノ善根モ悉ク皆滅失シテ、其國ニ當ニ三不祥ノ事アルベシ。一ニハ穀貴、二ニハ兵革、三ニハ疫病ナリ。一切ノ善神モ悉ク之ヲ捨離セン。其王教令スレドモ人隨從セズ、常ニ隣國ノ爲ニ侵燒セラレン。暴火横マ、ニ起リ。惡風雨多ク。暴水増長シテ人民ヲ吹漂シ。内外ノ親信咸ク共ニ謀叛セン。其王久シカラズシテ

當ニ重病ニ遇フベシ。壽終ルノ後ハ地獄ノ中ニ生ゼン。乃至王ノ夫
 人、太子、大臣、城主、村主、將帥、郡守、宰官ノ如キモ亦復是ノ
 如クナラン。已夫れ四經の文朗かなり。萬人誰か疑はん。而るに盲
 瞽の輩迷惑の人、妄ニ邪説を信トて、正教を辨せむ。故に天下世上
 諸佛衆經に於て捨離の心を生トて擁護の志無し。仍て善神聖人國を
 捨て所を去る。是を以て惡鬼、外道災を成レ難を致す矣。

▲第三段 内衆ノ
 破法ヲ論ス

客、色を作して曰く。後漢の明帝は、金人の夢を悟て、白馬の教を
 得。上宮太子は、守屋の逆を誅して、寺塔の構を成レぬ。爾より
 來た、上一人より下萬民に至るまで、佛像を崇め經卷を專よす。然
 バ則ち、叡山、南都、園城、東寺、四海一州五畿七道、佛經は星の
 ごとくに羅なり、堂宇は雲のごとくよ布けり。鷲子の族は、則ち鷲

●鷲子云々、鷲子ハ舍
 利弗を云ひ、鷲頭ハ靈
 鷲山を指す、即ち教者
 ヲ配す

●鶴勒云々、鶴勒ハ付
 法藏第二十二祖鶴那を
 云ひ、鶴尾ハ迦葉入定
 の山を指す、即ち祖者
 に配す

●竹葦稻麻、ハ孰れも
 數多きを云ふ

●仁王經、臨界品の文
 也

●涅槃經、德王品、(北
 本廿三、南本二十)

頭の月を觀。鶴勒の流は、亦鷲足の風を傳ふ。誰か一代の教を編
 て、三寶の跡を廢せりと謂はん哉。若一其證有らバ、委く其故を聞
 かん矣。

主人諭して曰く。佛閣裳を連ね、經藏軒を并ぶ。僧は竹葦の如く、
 侶は稻麻に似たり。崇重年舊り、尊貴日に新なり。但法師は諛曲に

いて人倫を迷惑。王臣ハ不覺にして邪正を辯すること無し。仁王

經に云く。諸ノ惡比丘多ク名利ヲ求メ、國王太子王子ノ前ニ於テ、

自破佛法ノ因縁、破國ノ因縁ヲ説カン。其王別タズシテ此語ヲ信聽

シ、横マ、ニ法制ヲ作りテ佛戒ニ依ラズ。是ヲ破佛破國ノ因縁ト爲

ス。已涅槃經云く。菩薩、惡象等ニ於テハ心ニ恐怖スルコト無カ
 レ、惡智識ニ於テハ怖畏ノ心ヲ生ゼヨ。惡象ノ爲メニ殺サレテハ三

●法華經 勸持品の文

趣ニ至ラズ。惡友ノ爲ニ殺サルレバ必ズ三趣ニ至ル。已上法華經に云く。惡世ノ中ノ比丘ハ、邪智ニシテ心諂曲ニ、未ダ得ザルヲ爲レ得タリト謂ヒ、我慢ノ心充滿セン。或ハ阿練若ニ、納衣ニシテ空閑ニ在テ、自ラ眞ノ道ヲ行ズト謂フテ、人間ヲ輕賤スル者有ラン。利養ニ貪著スルガ故ニ、白衣ノ與メニ法ヲ説テ、世ノ爲メニ恭敬セラル、コト、六通ノ羅漢ノ如クナラン。乃至、常ニ大衆ノ中ニ在テ、我等ヲ毀ラント欲スルガ故ニ、國王大臣婆羅門居士、及ビ餘ノ比丘衆ニ向テ、誹謗シテ我惡ヲ説テ、是邪見ノ人ニシテ、外道ノ論議ヲ説クト謂ハン。濁劫惡世ノ中ニハ、多ク諸ノ恐怖有ラン、惡鬼其身ニ入テ、我ヲ罵詈毀辱セン。濁世ノ惡比丘ハ、佛ノ方便隨宜所説ノ法ヲ知ラズシテ、惡口ニシテ擗蹙シ、數々擲出セ見レン。已上涅槃經に曰く

●涅槃經 北本ハ如來性品、南本ハ四相品に出づ

▲第四段 正シク破法ノ人ヲ擧ク

我涅槃ノ後無量百歳ニ、四道ノ聖人悉ク復タ涅槃セン。正法滅シテ後、像法ノ中ニ於テ、當ニ比丘有ルベシ。持律ニ似像テ、少カニ經ヲ讀誦シ、飲食ヲ貪リ嗜ミ、其身ヲ長養シ、袈裟ヲ著スト雖ドモ、猶獵師ノ細メニ視テ徐ニ行クガ如ク、猫ノ鼠ヲ伺フガ如シ。常ニ是言ヲ唱ヘン、我羅漢ヲ得タリト。外ニハ賢善ヲ現シ、内ニハ貪嫉ヲ懷カン。啞法ヲ受クル婆羅門等ノ如ク、實ニ沙門ニ非ズシテ、沙門ノ像ヲ現シ、邪見熾盛ニシテ、正法ヲ誹謗セン。已上文に就て世を見るに、誠に以て然なり矣。惡侶を誡めずんば、豈善事を成さん哉。客、猶憤りて曰く。明王は天地に因て化を成し。聖人は理非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の歸する所也。惡侶に於ては、明王信すべからず。聖人ニ非ざんば、賢哲も仰く可からず。今賢聖の尊

●龍象、大論三云是五千羅漢、於二羅漢中一最大力故、言二如龍如象一水行中龍力大、陸行中象力大、

●後鳥羽 人皇八十二代後鳥羽天皇、御諱ハ尊成、隱岐法皇と稱す
●法然 日本淨土宗祖圓光大師是也、長承二年四月七日(提婆と同一く月日)作州稻置に生る
●蓮華 唐土淨土家第二祖、安樂集の作者

●曇鸞 梁人也、菩提

流支に値て、遂に淨土の業を開く、天親菩薩の往生論に註す

●善導 初唐の人、道綽に受て大に淨土の教を興す、觀經疏等の作者

重せるを以て、則ち龍象の輕からざるを知る。何を妄言を吐いて、強に誹謗を成す。誰人を以て、惡比丘と謂ふ哉。委細に聞かんと欲す。

主人の曰く。後鳥羽院の御宇に、法然といふものあり、選擇集を作れり矣。則ち一代の聖教を破り、徧く十方の衆生を迷はす。其選擇に云く。

道綽禪師聖道淨土ノ二門ヲ立テ、聖道ヲ捨テ正シク淨土ニ歸スルノ文。初ニ聖道門トハ、之ニ就テ二有リ。乃至之ニ準ジテ之ヲ思フニ、應ニ密大及び實大ヲ存スベシ。然レバ則チ、今ノ眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論此等ノ八家ノ意正シク此ニ在ル也。曇鸞法師ノ往生論ノ註ニ云ク。謹ンデ龍樹菩薩ノ

十住毘婆娑ヲ案ズルニ云ク。菩薩阿毘跋致ヲ求ルニ二種ノ道有リ一ニ者難行道二ニ者易行道ナリ。此中ニ難行道ト者、即チ是レ聖道門也。易行道ト者、即チ是レ淨土門也。淨土宗ノ學者、先須ク此旨ヲ知ルベシ。設ヒ先ヨリ聖道門ヲ學ベル人ト雖ドモ、若シ淨土門ニ於テ其志有ラバ、須ク聖道ヲ弃テ淨土ニ歸スベシ。又云ク。善導和尚正雜二行ヲ立テ、雜行ヲ捨テ正行ニ歸スルノ文第一ニ讀誦雜行トハ、上ノ觀經等ノ往生淨土ノ經ヲ除イテ已外、大小乘顯密ノ諸經ニ於テ受持讀誦スルヲ、悉ク讀誦雜行ト名ク。第三ニ禮拜雜行トハ、上ノ彌陀ヲ禮拜スルヲ除イテ已外一切ノ諸佛菩薩及ビ諸ノ世天等ニ於テ禮拜恭敬スルヲ、悉ク禮拜雜行ト名ク。私ニ云ク。此文ヲ見ルニ、彌須ク雜ヲ捨テ專ヲ修スベシ。豈

百即百生ノ專修正行ヲ捨テ、堅ク千中無一ノ雜修雜行ニ執セン乎
行者能ク之ヲ思量セヨ。

又云ク。貞元入藏錄ノ中ニ、始メ大般若經六百卷ヨリ法常住經ニ
終ルマデ、顯密ノ大乘經總シテ六百三十七部二千八百八十三卷也
皆須ク讀誦大乘ノ一句ニ攝スベシ。當ニ知ルベシ、隨他ノ前ニハ
暫ク定散ノ門ヲ開クト雖ドモ、隨自ノ後ニハ還テ定散ノ門ヲ閉ツ
一タビ開イテ以後、永ク閉デザル者ハ、唯是レ念佛ノ一門ナリ。
又云ク。念佛ノ行者必ズ三心ヲ具足スベキノ文。觀無量壽經ニ云
ク。同經ノ疏ニ云ク。問テ云ク。若シ解行ノ不同邪雜ノ人等有リ
テ、外邪異見ノ難ヲ防ガン。或ハ行クコト一分二分ニシテ群賊等
喚ビ廻ストハ、即チ別解別行ノ惡見人等ニ喩フ。私ニ云ク。又此

中ニ一切ノ別解別行異學異見等ト言フ者、是レ聖道門ヲ指スナリ
已上

又、最後結句の文に云く。夫レ速ニ生死ヲ離レント欲セバ、二種
ノ勝法ノ中ニ、且ク聖道門ヲ開イテ、選デ淨土門ニ入レ。淨土門
ニ入ラント欲セバ、正雜二行ノ中ニ、且ク諸ノ雜行ヲ抛テ、選デ
正行ニ歸スベシ。曰

之に就て之を見るに。曇鸞、道綽、善導の謬釋を引て、聖道、淨土
難行、易行の旨を建て、法華、眞言總トて一代の大乘六百三十七部
二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道、
難行、雜行等に攝して。或ハ捨、或ハ閉、或ハ闕、或ハ抛、此四字
を以て多く一切を迷はし。剩へ三國の聖僧、十方の佛弟子等を以て

●附 聖也、易に聖蒙と云ふ是也
●傳教云々 孰も天台宗の先哲なり
●釋迦藥師云々 叡山東塔上觀院と藥師、西塔寶幢院は釋迦、又横川般若淵には地藏、戒

皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは、所依の淨土三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き。遠くは、一代五時の肝心法華經第二若人不信毀謗斯經、乃至、其人命終入阿鼻獄の誠文に迷へる者也。於是、代末代に及び人聖人に非せ、各冥衢に容て並に直道を忘る。悲い哉、瞳朦を拊たぎ。痛い哉、徒に邪信を催すこと。故に上國主より下土民に至るまで、皆經は淨土三部の外に經なく、佛ハ彌陀三尊の外に佛なしと謂へり。仍て傳教、義眞、慈覺、智證等或は萬里の波濤を涉て渡す所の聖教。或ハ一朝の山川を回て崇むる所の佛像若ハ高山の巔に華界を建て以て安置し。若ハ深谷の底に蓮宮を起て以て崇重し。釋迦藥師の光を竝ぶる也、威を現當に施し。虚空地藏の化を成す也、益を生後に被らしむ。故に國主ハ郡郷を寄せて以て

心谷に虚空藏あり、是れ光を並へ化を成すの極なり

燈燭を明かにし。地頭は田園を充て以て供養に備ふ。而るを法然の選擇に依て、則ち教主を忘れて、西土の佛陀を貴み。付屬を抛て、東方の如來を閑き。唯四卷三部の經典を專にして、空く一代五時の妙典を抛つ。是を以て彌陀の堂に非されば、皆供佛の志を止め。念佛の者に非されば、早く施僧の懷を忘る。故に佛堂零落して、瓦松の煙老い、僧房荒廢して庭艸の露深し。然りと雖も、各護惜の心を捨て、並に建立の思を廢す。是を以て、住持の聖僧ハ行て歸らざ。守護の善神ハ、去て來ること無し。是れ偏に、法然の選擇に依れば也。悲い哉數十年の間、百千萬の人、魔縁に蕩かされて、多く佛教に迷へり。傍を好で正を忘れんに、善神怒を成さざらん哉。圓を捨て偏を好まんに、惡鬼便を得ざらん哉。如かき彼萬祈を修せんより

▲第五段 正シク
選擇ノ謗法コレ災
由ナルヲ論斷ス

●八宗、天台、華嚴、
眞言、三論、法相、俱舍、
成實、律、なり

此一凶を禁せんには矣。
客、殊に色を作して曰く。我本師釋迦文、淨土の三部經を説きたま
ひてより以來。曇鸞法師ハ、四論の講説を捨て一向に淨土に歸し。
道綽禪師ハ、涅槃の廣業を閣いて、偏に西方の行を弘め。善導和尚
ハ、雜行を抛て專修を立て。慧心僧都ハ、諸經の要文を集めて念佛
の一行を宗とす。彌陀を貴重すると誠に以て然り矣。又往生の人、
其れ幾はくぞ哉。就中法然聖人ハ、幼少にして天台山に昇り、十七
にして六十卷に涉り、並に八宗を究め、具に大意を得たり。其外一
切の經論七遍まで反覆し、章疏傳記究め看ざるハ莫し。智ハ日月に
齊く、徳ハ先師に越へたり。然りと雖も、猶出離の趣に迷ふて、
涅槃の旨を辨へず。故に徧く觀、悉に鑑み、深く思ひ遠く慮て、遂

●毛を吹て 孔子家語
云所好則鑽皮出二毛
羽二所惡則洗之垢求二
其疵一

に諸經を抛て専ら念佛を修す。其上一夢の靈應を蒙て、四裔の親疎
を弘む。故に、或ハ勢至の化身と號し。或ハ善導の再誕と仰ぐ。然
れば則ち、十方の貴賤ハ頭を低れ、一朝の男女ハ歩を運ぶ。爾よ
り來た春秋推し移り、星霜相ひ積めり。而るに忝なくも、釋尊の教
を疎かにして、恣まゝに彌陀の文を譏る。何ぞ、近年の災を以て、
聖代の時小課せ、強て先師を毀り、更ハ聖人を罵るや。毛を吹て疵
を求め、皮を剪て血を出す。昔より今に至るまで、此の如きの惡言
未だ聞あざ。惶るべし慎む可し。罪業至て重し、科條争か遁れん。
對坐猶以て恐有り、杖を携へて則ち歸らんと欲す矣。
主人、笑み止めて曰く。辛さを蓼葉お習ひ、臭さを溷廁に忘る。善
言を聞て惡言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ。正師を疑て惡侶に

擬す。其迷誠に深く、其罪淺からず。汝事の起を聞け、委しく其趣
 と談せん。釋尊說法の内、一代五時の間に、前後を立て、權實を
 辯せ。而るに、曇鸞、道綽、善導既に權に就て實を忘れ、先に依て
 後を捨つ、未だ佛教の淵底を探らざる者なり。就中法然其流を酌む
 と雖も其源を知らず。所以者何ん。大乘經六百二十七部、二千八
 百八十三卷、并に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て、捨閑闕拋
 の字を置いて、一切衆生の心を蕩す。是れ偏へに私曲の詞を展て、全
 く佛經の説を見せ。妄語の至り、惡口の科、言ふても比ひ無く、責
 ても餘り有り。人皆其妄語を信し、悉く彼選擇を貴む。故に淨土の
 三經を崇めて、衆經を抛ち。極樂の一佛を仰で、諸佛を忘る。誠に
 是れ諸佛諸經の怨敵、聖僧衆人の讎敵也。此邪教、廣く八荒に弘ま

●又云、止觀二の文、
 ●阮籍、字は嗣宗、西
 晋の人、自然説を執て
 禮教を輕じたる人也

り。周く十方に遍す。抑近年の災難を以て往代に課するの由強ちに
 之を恐る。聊か先例を引て、汝が迷を悟す可し。止觀第二に、史記
 を引て云く。周ノ末ニ被髮袒身ニシテ禮度ニ依ラザル者有リ」と。弘
 決第二に、此文を釋するに、左傳を引て曰く。初メ平王ノ東遷スル也
 伊川ニ被髮ノ者ノ野ニ於テ祭ルヲ見ル。識者ノ曰ク。百年ニ及バシ、
 其禮先亡ビヌ」と。爰に知ぬ。徵前に顯れて、災後に至ることぞ。
 又云く。阮籍逸才ニシテ蓬頭散帶ス。後ニ公卿ノ子孫皆之ニ教フテ
 奴苟シテ相辱シムル者ナ方ニ自然ニ達ストイヒ。擲節執持スル者ナ
 呼デ田舎ト爲ス。是ヲ司馬氏ノ滅ブル相ト爲ス。已又、慈覺大師ノ
 入唐巡禮記を案ざるに云く。唐ノ武宗皇帝會昌元年敕シテ章敬寺ノ
 鏡霜法師ヲシテ、諸寺ニ於テ彌陀念佛ノ教ヲ傳ヘシム。寺毎ニ三日

巡輪シテ絶へズ。同ク二年回鶻國ノ軍兵等唐ノ界ヲ侵ス。同ク三年河北ノ節度使忽ヲ亂ヲ起ス。其後大蕃國更ニ命ヲ拒ミ。回鶻國、重テ地ヲ奪ヒ。凡ソ兵亂ハ秦項ノ代ニ同ク。災火、邑里ノ際ニ起ル。何ニ況ンヤ、武宗、大ニ佛法ヲ破リ、多ク寺塔ヲ滅ス。亂ヲ撥ムルコト能ハズ、遂ニ以テ事有リ。取此を以て之を惟ふに。法然は、後鳥羽院の御宇建仁年中の者也。彼院の御事、既に眼前に在り。然らバ即ち、大唐に例を殘し、吾朝に證を顯す。汝疑ふと莫れ。汝怪むと莫れ。唯須く凶を捨て善に歸し、源を塞いで根を截るべし矣。客、聊る和いで曰く。未だ淵底を究めざれども、數其趣を知る。但し花洛より柳營に至るまで、釋門に樞樞あり。佛家に棟梁あり。然れども未だ勘狀を進らせせ、上奏にも及ばず。汝賤き身を以て、輒

▲第六段 法然彈斥ノ先例ヲ舉グ

く莠言を吐く。其義餘り有り、其理謂れ無し。

主人の曰く。予少量たりと雖ども、忝くも大乘を學ぶ。蒼蠅驥尾に附て、萬里を渡り。碧羅松頭に懸りて、千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生れて、諸經の王に事うまつる。何を佛法の衰微を見て、心情の哀惜を起さざらんや。其上、涅槃經に云く。若シ善比丘アツテ、法ヲ壞ル者ヲ見テ、置テ呵責シ驅遣シ舉處セズンバ、當ニ知ルベシ、是人ハ佛法ノ中ノ怨ナリ。若シ能ク驅遣シ、呵責シ、舉處セバ、是我弟子眞ノ聲聞也」と。余、善比丘の身たらせと雖ども。佛法中怨の責を遁れんが爲に、唯大綱を撮て、粗一端を示す。其上去ぬる元仁年中、延曆、興福兩寺より、度々奏聞を経て、敕宣御教書を申し下し。法然が選擇の印板を、大講堂に取り上げ、三世の佛恩を報せ

●涅槃經 長壽品の文也

んが爲に、之を焼失せしめ。法然が墓所に於てハ、感神院の大神人に仰せ付て、破却せしむ。其門弟隆觀、聖光、成覺、薩生等ハ遠國に配流せられ、其後未だ御勘氣と許されず。豈未だ勸状を進らせざと云はんや。

客、則ち和いで曰く。經を下し僧と謗ると一人として論ト難し。然れども大乘經六百三十七部二千八百八十三卷竝に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等と以て捨閉閣抛の四字に載す。其詞勿論也。其文顯然也。此瑕瑾と守て其誹謗を成す。迷て言ふ歟、覺て語る歟、賢愚辨たぎ、是非定め難し。但し災難の起り選擇に因るの由、盛に其詞を増し、彌其旨を談む。所詮、天下泰平に、國土安穩ならんとい、君臣の樂ふ所、土民の思ふ所也。夫れ國ハ法に依て昌へ、法ハ人より因

第七段 禪災ノ術ヲ明ス

●涅槃經 大衆所問品の文

て貴し。國亡び人滅せば、佛を誰の崇むべき、法をば誰の信せ可けん哉先國。家を祈て須く佛法を立つべし。若し災を消し、難を止むるの術有らば、聞かんと欲す。主人の曰く。余ハ是れ頑愚にして、敢て賢を存せむ。唯經文に就て聊る所存を述ん。抑治術の旨、内外の間に其文幾はく多き、具に擧ぐべきと難し。但し、佛道に入て數愚案を回らすに。謗法の人を禁トて、正道の侶を重せば、國中安穩に、天下泰平ならん。即ち涅槃經に云く。佛ノ言ハク。唯一人ヲ除イテ、餘ノ一切ニ施サバ、皆讚歎ス可シ。純陀、問テ言ク。云何ナルヲ名ケテ唯除一人ト爲スヤ。佛ノ言ハク。此經ノ中ニ説ク所ノ如キ破戒ナリ。純陀復タ言サク。我今未ダ解セズ。唯願クハ之ヲ説キタマヘ。佛純陀ニ語テ言ハク。

破戒トハ、謂ク一闍提ナリ。其餘ノ在所、一切ニ布施セバ、皆讚歎ス可シ、大果報ヲ獲ン。純陀、復タ問ヒタテマツル。一闍提トハ、其義云何ン。佛ノ言ハク。純陀、若シ比丘及比丘尼優婆塞優婆夷有テ、惡惡ノ言ヲ發シ正法ヲ誹謗セン、是重業ヲ造テ永ク改悔セズ心ニ懺悔無カラシ。是ノ如キ等ノ人ヲ名ケテ、一闍提ノ道ニ趣向スト爲ス。若シ四重ヲ犯シ、五逆罪ヲ作り、自定メテ是ノ如キ重事ヲ犯スト知レドモ、而モ心ニ初ヨリ怖畏懺悔無フシテ肯テ發露セズ、彼正法ニ於テ永ク護惜建立ノ心無ク、毀譽輕賤シテ言ニ過咎多カラシ。是ノ如キ等ノ人ヲモ、亦一闍提ノ道ニ趣向スト名ク。唯此ノ如キ一闍提ノ輩ヲ除イテ、其餘ニ施サバ、一切讚歎スベシ。又云く。我、往昔ヲ念フニ。閻浮提ニ於テ、大國ノ王ト作テ、名ヲ仙豫ト曰

●四重、殺、盜、姦、妄、
●五逆、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血、

●又云、聖行品の文

ヒキ。大乘經典ヲ愛念シ敬重ス。其心純善ニシテ、惡惡嫉吝有ルコト無シ。善男子、我爾時ニ於テ、心ニ大乘ヲ重シ、婆羅門ノ方等ヲ誹謗スルヲ聞キ、聞キ已テ即時ニ其命根ヲ斷テヌ。善男子、是ノ因緣ヲ以テ、是ヨリ已來地獄ニ墮セズ。又云く。如來昔シ國王ト爲テ菩薩道ヲ行ゼシ時爾所ノ婆羅門ノ命ヲ斷絶シキ。又云く。殺ニ三有リ。謂ク、下中上ナリ。下トハ、蟻子乃至一切ノ畜生ナリ。唯菩薩ノ示現生ノ者ヲ除ク。下殺ノ因緣ヲ以テ、地獄畜生餓鬼ニ墮ナテ、具ニ下ノ苦ヲ受ク。何ヲ以テノ故ニ。是ノ諸ノ畜生ニハ、微善根アリ。是ノ故ニ、殺ス者ハ具ニ罪報ヲ受ク。中殺トハ、凡夫ヨリ阿那含ニ至ルマデ、是ヲ名ケテ中ト爲ス。是ノ業因ヲ以テ、地獄畜生餓鬼ニ墮ナテ、具ニ中ノ苦ヲ受ク。上殺トハ、父母乃至阿羅漢、辟支

●又云、梵行品の文
●又云、同じ

●仁王經、受持品の文

佛、畢定ノ菩薩ナリ。阿鼻大地獄ノ中ニ墮ツ。善男子、若シ能ク一闍提ヲ殺スコト有ラン者ハ、則チ此三種ノ殺ノ中ニ墮セズ。善男子、彼諸ノ婆羅門等ハ、一切皆是レ一闍提也。上仁王經に云く。佛、波斯匿王ニ告ゲタマハク。是ノ故ニ、諸ノ國王ニ付屬シテ、比丘比丘尼ニ付屬セズ。何ヲ以テノ故ニ、王ノゴトキ威力無ケレバナリ。上涅槃經に云く。今無上ノ正法ヲ以テ、諸王大臣宰相及ビ四部ノ衆ニ付屬ス。正法ヲ毀ラン者ヲバ、大臣四部ノ衆應當ニ苦治スベシ。又云く。佛ノ言ハク。迦葉能ク正法ヲ護持スル因縁ヲ以テノ故ニ、是金剛身ヲ成就スルコトヲ得タリ。善男子、正法ヲ護持セン者ハ、五戒ヲ受ケズ、威儀ヲ修メズシテ、刀劍弓箭鋒槩ヲ持ツ應シ。又云く若シ五戒ヲ受持セン者有ラバ、名ケテ大乘ノ人ト爲スコトヲ得ズ。

●又云、金剛身品

●又云、同じ

●又云、同じ

五戒ヲ受ケザレドモ、正法ヲ護ルコトヲ爲セバ、乃チ大乘ト名ク。正法ヲ護ル者ハ、應當ニ刀劍器仗ヲ執持スベシ。刀杖ヲ持ツト雖ドモ、我是等ヲ説テ名ケテ持戒ト曰ハシ。又云く。善男子過去ノ世ニ此拘尸那城ニ、佛出世シタマフコト有リ、歡喜增益如來ト號ス。佛涅槃ノ後、正法世ニ住スルコト、無量億載ナリ、餘ノ四十年ニ、佛法未ダ滅セズ。爾時ニ一ノ持戒ノ比丘有リ、名ヲ覺徳ト曰フ。爾時ニ多ク破戒ノ比丘有リ、是ノ説ヲ作スナ聞テ、皆惡心ヲ生ジテ、刀杖ヲ執持シテ、是ノ法師ヲ逼ム。是ノ時ノ國王、名ヲ有徳ト曰フ。是ノ事ヲ聞キ已テ、護法ノ爲メノ故ニ、即便説法者ノ所ニ往至シテ是ノ破戒ノ諸ノ惡比丘ト極メテ共ニ戰鬪シ、爾時ノ説法者ヲシテ厄害ヲ免ル、コトヲ得セシム。王、爾時ニ於テ、身ニ刀劍箭槩ノ瘡ヲ

被リ、體トシテ完キ處芥子許モ無シ。爾時ニ覺德、尋デ王ヲ讚メテ
 言ク。善哉、善哉、王今眞ニ是レ正法ヲ護ル者ナリ。當來ノ世ニ、
 此身當ニ無量ノ法器ト爲ルベシ。王此ノ時ニ於テ法ヲ聞クコトヲ得
 己テ、心大ニ歡喜シテ、尋デ即ケ命終シテ、阿闍佛ノ國ニ生ジテ、
 彼佛ノ爲ニ第一ノ弟子ト作ル。其王ノ將從、人民、眷屬ノ戰鬪スル
 コト有リシ者。歡喜スルコト有リシ者。一切菩提ノ心ヲ退セズ、命
 終シテ悉ク阿闍佛ノ國ニ生ズ。覺德比丘卻テ後壽終テ、亦阿闍佛ノ
 國ニ往生スルコトヲ得テ、彼佛ノ爲メニ聲聞衆ノ中ノ第二ノ弟子ト
 作ル。若シ正法ノ盡キント欲スル時アラバ、應當ニ是ノ如ク受持シ
 擁護スベシ。迦葉、爾時ノ王者、則ケ我身是ナリ。說法ノ比丘ハ、
 迦葉佛是ナリ。迦葉、正法ヲ護ラン者ハ、是ノ如キ等ノ無量ノ果報

法華經 譬喻品の文

ヲ得ン。是ノ因縁ヲ以テ、我今日ニ於テ種々ノ相ヲ以テ自莊嚴シ、
 法身不可壞ノ身ヲ成ズルコトヲ得タリ。佛、迦葉菩薩ニ告ゲタマハ
 ク。是ノ故ニ護法ノ優婆塞等、刀杖ヲ執持シテ、擁護スルコト是ノ
 如クス應ジ。善男子、我涅槃ノ後、濁惡ノ世ニ、國土荒亂シ、互ニ
 相ヒ抄掠シ、人民飢餓セン。爾時ニ多ク飢餓ノ爲ノ故ニ、發心出家
 スルモノ有ラン、是ノ如キノ人ヲ名ケテ禿人ト爲ス。是ノ禿人ノ輩
 正法ヲ護持スルヲ見テ、驅逐シテ出サシメ、若ハ殺シ若ハ害セン。
 是ノ故ニ、我今持戒ノ人ニ、諸ノ白衣ノ刀杖ヲ持テル者ニ依テ以テ
 伴侶ト爲ルコトヲ聽ス。刀杖ヲ持ツト雖ドモ、我是等ヲ説テ名ケテ
 持戒ト曰ハン。刀杖ヲ持ツト雖ドモ、命ヲ斷ズ應カラズ。已上法華經
 ニ云ク。若シ人信ゼズシテ、此經ヲ毀謗セバ、則ケ一切世間ノ佛種

ヲ斷ゼン。乃至、其人命終シテ、阿鼻獄ニ入ラン。聖文 夫れ經文顯
 然たり。私の詞、何ぞ加へん。凡法華經の如くんバ、大乘經典を謗
 る者ハ、無量の五逆に勝る、故に阿鼻大城に墮ちて、永く出る期無
 し。涅槃經の如くんバ、設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施をバ許
 さず。蟻子を殺す者ハ、必き三惡道に落つ。謗法を禁むる者は、定
 めて不退の位に登る。所謂、覺徳ハ是れ迦葉佛なり。有徳ハ則ち釋
 迦文也。法華、涅槃の經教ハ、一代五時の肝心也。其禁實に重し。
 誰か歸仰せざらん哉。而に、謗法の族、正道の人を忘れ。剩さへ法
 然の選擇に依て彌愚痴の盲瞽を増す。是を以て、或ハ彼遺體を忍ん
 で木畫の像に露はし。或ハ、其妄説を信じて、莠言を模に彫り、之
 を海内に弘め、之を郭外に翫をふ。仰ぐ所ハ、則ち其家風。施す所

▲第八段 禁斷謗
 法ノ術ヲ明ス

●大集經 大集月藏經
 法滅盡品の偈

ハ、則ち其門弟なり。然る間或ハ釋迦の手指を切て彌陀の印相を結
 び。或ハ東方如來の鴈宇を改めて、西土教主の鵝王を居へ。或ハ四
 百餘回の如法經を止めて、西方淨土の三部經と成す。或ハ天台大師
 の講を停めて、善導の講と爲す。此の如きの群類、其れ誠に盡し難
 し。是れ破佛に非ざ哉。是れ破法に非ざ哉。是れ破僧に非ざ哉。此
 邪義ハ。則ち選擇に依れば也。嗟呼、悲い哉、如來誠諦の禁言に背
 くこと。哀れなる矣、愚侶迷惑の蠱語に隨ふと。早く天下の靜謐を
 思は、須らく、國中の謗法を斷ぎべし矣。
 客の曰く。若し謗法の輩を斷ト、若し佛禁の違を絶んにハ。彼經文
 の如く、斬罪に行ふべき歟。若し然らば、殺害相ひ加へん、罪業何
 んが爲ん哉。則ち、大集經云く。頭ヲ剃リ袈裟ヲ著セバ、持戒及

毀戒ヲモ、天人被ヲ供養スベシ。則チ我ヲ供養スルニナンヌ、是
 レ我子ナレバナリ。若シ彼ヲ搥打スルコト有レバ、則チ爲レ我子ヲ打
 ツナリ。若シ彼ヲ罵辱セバ、則チ爲レ我ヲ毀辱スルナリ」と。料知
 ぬ、善惡を論ぜざ、是非を擇ぶと無く、僧侶たるに於てハ、供養を
 展ぶべし。何ぞ其子を打辱して、忝なくも其父を悲哀せしめんや。
 彼竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み。提婆達多の蓮
 華比丘尼を殺せしや、久く阿鼻の焰に咽ふ。先證斯れ明かなり、後
 毘最も恐あり。謗法を誡むるに似て、既に禁言を破る。此事信ト難
 し、如何が意を得んや。

主人の曰く。客明かに經文を見て、猶斯言を成す。心の及ばざる歎
 理の通せざる歎。全く佛子を禁するにハ非ず、唯偏に謗法を惡む也

▲第九段 對治チ
 急ニスベキヲ勸誠
 ス

夫れ釋迦の以前の佛教ハ、其罪を斬ると雖ども。能仁の以後の經說
 ハ、則ち其施を止む。然バ則ち、四海萬邦一切の四衆、其惡に施さ
 ずして、皆此善に歸せば。何なる難か並び起り、何なる災か競ひ來
 らんや。

客、則ち席を避け、襟を刷で曰く。佛教斯れ區にして、旨趣窮め難
 し。不審多端にして、理非明かならず。但し、法然聖人の選擇現在
 也。諸佛諸經諸菩薩諸天等を以て捨閑闕抛に載す、其文顯然也。茲
 に因て聖人國と去り、善神所と捨つ、天下飢渴と、世上疫病とと。
 今主人廣く經文を引て、明かに理非を示す。故に妄執既に翻り、耳
 目數明かなり。所詮、國土泰平天下安穩は、一人より萬民に至るま
 で、好む所也、樂ふ所也。早く一闡提の施を止めて、永く衆僧尼の

供と致し。佛海の白浪を収め、法山の緑林を截らば、世ハ義農の世と成り、國ハ唐虞の國と爲らん。然して後に法水の淺深を斟酌し、佛家の棟梁と崇重せん矣。

●鳩變雀變、禮記に仲春鷹化為鳩、仲秋鳩化為鷹、雀變秋雀入大水一爲蛤となり
●麻敵の性、大論十四云、自然人善、譬如曲辨生三麻中、不扶自直上

主人、悦で曰く。鳩化して鷹と爲り、雀變トて蛤と爲る。悦ばし哉、汝蘭室の友に交つて麻敵の性と成る。誠に其難を顧み、専ら此言を信せば。風和き浪靜にして、不日に豊年ならん耳。但し、人の心ハ時に隨て移り、物の性ハ境に依て改まる。譬バ、尙水中の月の波に動き、陣前の軍の劍に靡くがごとし。汝當座ハ信ずと雖も、後定めて永く忘れん。若し先國土と安んトて、現當と祈らんと欲せば。速に情慮を回らし、急で對治を加へよ。所以者何ん。藥師經七難の内、五難忽に起て二難猶殘れり。所以、他國侵逼の難、自界叛

逆の難也。大集經の三災の内、二災早く顯れ一災未だ起らず。所以兵革の災也。金光明經の内、種々の災禍一に起ると雖も、佻方の怨賊國內を侵掠する、此災未だ露れず、此難未だ來らず。仁王經七難の内、六難今盛にして一難未だ現せず。所以四方の賊來て國を侵す難也。あかのみならず、國土亂れん時ハ、先鬼神亂る。鬼神亂る、が故に萬民亂ると。今此文に就て、具に事の情と案するに。百鬼早く亂れ、萬民多く亡びぬ。先難是れ明なり、後災何ぞ疑はん。若し殘る所の難、惡法の科に依て、並び起り競ひ來らば、其時ハ何んがせん哉。帝王ハ、國家を基として天下を治め。人臣ハ、田園を領して世上を保つ。而るに他方の賊來て其國を侵逼し、自界叛逆して其地を掠領せば、豈驚かざらん哉。豈騒がざらん哉。國を失ひ家

●大集經 再引、但一前ハ善神捨國を証し、今ハ謗法墮獄を証す、
●仁王經 屬品品の文

を滅さば、何の處にか世を遁れん。汝須く一身の安堵を思ハ、先
四表の靜謐を禱るべき者歟。就中。人の世に在る各後生を恐る。是
を以て或ハ邪教を信ト。或ハ謗法を貴む。各是非に迷ふを惡むと雖
ども、猶佛法に歸すると哀む。何を同く信心の力を以てして、妄
に邪義の詞を宗ばんや。若し執心翻らず、亦曲意猶存せば。早く有
爲の郷を辭して、必き無間の獄に墮せん。所以者何、大集經に云く
若シ國王有テ、無量世ニ於テ施戒慧ヲ修ストモ。我法ノ滅センヲ見
テ、捨テ擁護セズンバ。是ノ如ク種ル所ノ無量ノ善根、悉ク皆滅失
セン。乃至其王久シカラズシテ、當ニ重病ニ遇フベシ。壽終ルノ後
大地獄ノ中ニ生ゼン。王ノ夫人太子大臣城主村師郡主宰官ノ如キモ
亦復此ノ如クナラン。仁王經に云く。人佛教ヲ壞セバ、復孝子無ク

●涅槃經 迦提品の文

六親不和ニシテ、天神モ祐ケズ、疾疫惡鬼日ニ來テ侵害シ、災怪首
尾シ、連禍縱横シ、死シテ地獄餓鬼畜生ニ入り、若シ出テ人ト爲ラ
バ、兵奴ノ果報ナラン。響ノ如ク、影ノ如シ。人ノ夜書クニ、火ハ
滅スレドモ字ハ存スルガ如ク。三界ノ果報モ、亦復是ノ如シ。法華
經第二に云く。若シ人信ゼズシテ、此經ヲ毀謗セバ、乃至、其人命
終シテ阿鼻獄ニ入ン。又同く第七の卷、不輕品に云く。千劫阿鼻
地獄ニ於テ、大苦惱ヲ受ク。涅槃經に云く。善友ヲ遠離シ正法ヲ聞
カス惡法ニ住セバ、是因縁ノ故ニ、沈没シテ阿鼻地獄ニ在テ、受ル
所ノ身形縱横八万四千由延ナラン」と。廣く衆經を披きたるに、專
謗法を重しとす。悲い哉、皆正法の門を出で、深く邪法の獄に入る
と。愚なる矣、各惡教の網に懸て、鎖へに謗教の網に纏はると。此

曠霧の迷に依て、彼盛焰の底に沈む。豈愁へざらん哉。豈苦じからざらん哉。汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乗の一善に歸せよ。然バ則ち、三界ハ皆佛國也。佛國其れ衰へん哉。十方悉く寶土也。寶土何を壞せん哉。國に衰微無く、土に破壊無んバ。身ハ是れ安全にして、心ハ是れ禪定ならん。此詞此言信す可し、崇む可し。

▲第十段 信伏領

客の曰く。今生後生、誰か慎まざらん。誰か恐れざらん。此經文と披て、具に佛語と承はるに。誹謗の科、至て重く。毀法の罪、誠に深し。我一佛と信して諸佛と抛ち、三部經と仰で諸經と闕さしハ、是れ私曲の思に非ず。則ち先達の詞に隨ひしなり。十方の諸人も、亦復是の如くなるべし。今生にハ性心を勞し、來生にハ阿鼻に墮せんと、文明かに理詳かなり疑ふべからず。彌貴公の慈誨と仰で、益

愚客の癡心を開けり。速に對治を回らし、早く泰平を致し。先生前を安んじ、更に後後を扶からん。唯我信するのみに非ず、又他の誤を誠めん耳

訓譯 立正安國論 大尾 讀本

訓譯讀本立正安國論附錄

欽ツシムテ 大婚五々ノ盛典ヲ賀シ奉リテ

佛教夫婦論ヲ献上シタテマツルノ疏

〔原漢文〕

兩陛下ガ最愛ナル御民ミタマ臣立正安國會々頭田中巴之助等誠恐誠惶、謹ツツシムテ言コトス。古イコノヨリ、德トクヲ天地ニ
 比シ、明アキラヲ日月ニ喩ユヘ、以テ君德キミノトクヲ頌ツツシムスルモノ、諸シヨヲ文籍ニ聞クヤ久シ。而シカモ今
 ソノ實マコトヲ 陛下ニ見ミタテマツル。俯ツツシムシテ惟オノミルニ、 陛下、允マコト文允マコト武、制ツツシム端ツツシムク政
 昱ツツシムカニ。維ツツシム仁維ツツシム惠、恩隆ツツシムク澤洽ツツシムシ。上ハ 祖宗ノ大謨マコトヲ續ツツシムギ、下ハ萬世ノ洪範マコトヲ
 奠ツツシムメタマフ。祈ツツシムナルカナ中興ノ偉業。民稱ツツシムシテ以テ第二ノ 神武聖帝ト爲ス、斯
 レ虚頌ツツシムニ匪ツツシムルナリ。重ツツシム加、 皇后陛下、仁讓ツツシム内ニ蘊ツツシムミ、淑雅ツツシム外ニ應ツツシムニ。窮孤ツツシムヲ艸
 野ニ問ツツシムヒ、禮文ツツシムヲ宮闈ツツシムニ督ツツシムシタマフ。民稱ツツシムシテ以テ第二ノ 光明聖后ト爲ス、亦
 タ虚頌ツツシムニ匪ツツシムルナリ。臣等何ノ宿福ツツシムアリテカ、生ツツシムレテ茲ツツシム 聖世ニ値ツツシムヒ、坐ツツシムシテ茲ツツシム
 恩光ツツシムヲ濫ツツシムク。天長ツツシムニ晴ツツシムレ、地久ツツシムク明ツツシムニ。日月並ツツシムビ懸ツツシムテ茲ツツシム黎民ツツシムヲ照ツツシムスモノ、ユ、ニ

奏疏

二十五年矣。今茲三月九日。千古ノ大典ヲ舉ゲ、詔シテ民ト俱ニ慶御シタマフ
臣等欣怡措ク所ヲ知ズ。終ニ躬ノ鄙庸ヲ念フニ違アラズ、趨テ闕下ニ伏シ、竦デ
昇儀 佛教夫婦論一卷ヲ献上シテ、恭ク欽祝ノ微ヲ表ス。臣等誠恐誠惶頓首頓首
窮巷ノ小民、固ヨリ以テ饋ヲ腆シ儀ヲ盛ニスルニ足ズ。故ニ敢テ微言ヲ正シテ、
以テ之ヲ上ル。所謂其ノ忠ヲ獻ズルノ意耳。佛教夫婦論述ブル所、佛教ノ實義ニ
聿遵シ、人倫ノ常經ヲ覈明ス。止ダ顯ラ庶民ノ夫婦ヲ説テ、事ハ素ヨリ 天閣ニ
關ラズ。然リト雖モ、斯民ハ乃チ是レ 陛下ノ民ナリ、此道ハ乃チ是レ 陛下ノ
道ナリ。故ニ能ク斯民ヲシテ此道ニ篤カラシメ、此教ヲシテ斯民ニ洽カラシムル
ハ、是レ 臣等ガ 陛下ニ忠ニシテ、而モ教祖ニ孝ナル所以ノ道ノミ矣。臣等竊ニ
以ミルニ。世間ノ佛ヲ斥フ者、多ク佛教ヲ以テ世外ノ道ト爲ス、是レ佛教ヲ誤レ
ルナリ。佛ヲ奉ズル者モ、間マ亦タ人生ヲ以テ厭フベキノ地ト爲ス、是レ國家ヲ
誤レルナリ。夫レ佛法ノ端メテ本邦ニ傳ルヤ、當時或ハ未ダ全ク吾國情ニ愜ハザ
ルモノアリ。后 聖德皇太子ノ出ヅルニ越デ、篤ク佛法ヲ奉シ、云ニ修メ云ニ述
ベ。コレヲ 皇道ニ融シ、コレヲ儒教ニ諧ヘ。勒シテ以テ本邦萬世ノ憲教ト爲ス。

爾來 列聖上ニ繼デ、夏ニ斯道ヲ興シ。群英下ニ起テ、荐ニ 王化ヲ輔ク。前ニ
行基アリ。後ニ最澄アリ。晉ヒ次デ熾ニ神佛本迹ノ説ヲ唱ヘ、以テ巧ニ國ト教ト
ヲ融シテ、而シテ各之ヲ靈ニス。人或ハ以テ國神ヲ干シ澆スト爲スモノハ、是レ偏
狹ノ見ノミ。佛ノ教。本邦ニ入り、以テ本邦ノ民ヲ化ス、即チ是レ本邦ノ宗教ヲ
リ矣。且ツ矧ヤ乃往釋迦文、遠ク本邦ヲ識シテ、以テ應ニ一闍浮提ヲ統御スベキ
ノ國ト爲ス。玄鑑斯レ靈ニ、懸記斯レ膺リ。貞應ノ歲、天。本化上行ヲ吾東海ノ
濱ニ降ス。斯レ 陛下ノ先民ニシテ、而モ 臣等ガ先師、釋ノ日蓮寔ニ是ナリ。説
ク所口、遼ニ前代ニ絶レ。期スル所口、遠ク後世ヲ炤ス。嘗テ立正安國論ヲ撰シ
テ、切リニ憲府ヲ諫ム。其略ニ云ク、夫レ國ハ法ニ依テ而シテ昌ヘ、法ハ人ニ因
テ而シテ貴シ。國亡ビ、人滅セバ。佛ヲ誰カ崇ムベキ、法ヲ誰カ信ズベキ哉。
先ツ國家ヲ祈リテ、須テ佛法ヲ立ベシト。日蓮ノ宗教ニ於ケルヤ、ソレ斯ノ如
シ。又ソノ副元帥ノ執事平賴綱ヲ警ムル言ニ曰ク。就中日蓮生ヲ此土ニ獲タリ、
豈ニ此國ヲ念ハザランヤト。又曰ク。世チ安シ國チ安ズルヲ、忠ト爲シ孝ト爲
ス。ト。日蓮ノ國家ニ於ケルヤ、ソレ斯ノ如シ。昔者佛門ノ先賢、單ダ本邦ヲ指

シテ、以テ閻浮ノ日本ト爲ス。日蓮乃チ啻ニ本邦ヲ以テ、日本ノ日本ト爲スノミ
ニアラズ、亦タ將ニ閻浮ヲ以テ、却テ日本ノ閻浮ト作サントス。故ニソノ閻浮統
一ノ本尊ヲ圖出スルヤ、系ルニ天照八幡ノ兩廟ヲ以テス。是レ豈ニ本邦ノ祖
神ヲ以テ、直ニ一閻浮提ノ宗廟ト爲ス者ニアラズ耶。昔者佛門ノ先賢、佛法ト王
法トヲ解シ、以テ雙立相倚ト爲ス。日蓮乃チ以テ冥合壹體ト爲シ、且ツ曰ク。王
法ハ佛法ニ冥シ、佛法ハ王法ニ合シテ、王臣一同ニ三秘密ノ法ヲ持ツトキハ、則
チ當サニ大詔一下スルヲ待テ、聿ニ閻浮同歸ノ戒壇ヲ、日本最勝ノ地ニ建ツル
ノ時アルベシ。惟ダ旃ヲ俟ツノミト。日蓮ノ皇室ニ於ケルヤ、ソレ斯ノ如シ
矣。然リ而シテ、古來佛ヲ奉ズル者。或ハ俗ヲ出デ塵ヲ脫シ、岸然自ラ高シテ、
而シテ以テ淨ト爲ス者アリ。或ハ世ヲ厭ヒ生ニ倦ミ、矇然自ラ昧シテ、而シテ以
テ瞻レリト爲ス者アリ。並ニ皆法山ノ妖魔、又是レ教天ノ熒惑ナリ。是ヲ以テ、
正氣日ニ耗シ、義親ノ道、寢ク瀆シ。况ヤ彼ノ男女婚嫁ノ道、寧ロ獨リ茲教澤ニ
頼ルヲ得ンヤ。只索然、國家ヲ抛ナテ、徒ニ空閑ヲ貪リ。昏然、人生ニ此ヒテ、
空ク來世ヲ趁フ。咸ク是レ權小ノ偏見。日蓮之ヲ呵シテ、魔説ト爲シ、獄業ト爲

ス。夫レ惟フニ、釋迦ハ諸佛ノ本主ニシテ、而シテ法華經ハ衆典ノ經王ナリ。然
ルニ奉シテ以テ之ヲ崇バズ。妄リニ權小ノ法佛ヲ擁シテ、而シテ僭シテ宗ト稱ス。
不臣焉ヨリ甚シキハ莫シ。教既ニ正カラズ、曷ゾ能ク國ヲ安ゼン。既ニ國家ヲ忘
ル、亦タ奚ゾ世間ヲ濟ハン。故ニ日蓮之ヲ糾シ、首トシテ經王ノ旨ヲ唱ヘ。毅然、
釋迦ヲ奉シテ、本主ト爲ス。名分ヲ正シテ、而シテ大義ヲ明ニスル所以ナリ。夫
レ人ノ大倫ハ、夫婦ニ肇リ。禮教ノ重キヲ、婚嫁ニ在リ。忠孝節義、亦タ悉ク此ニ
原ク。即チ是レ國家生息ノ基本ナリ。佛教夫婦論ハ、廻チ斯要義ヲ注シテ、以テ
聊カ佛教濟世ノ直路ヲ拓ク。慎デ式ヲ立正安國論ニ資リテ、而シテ厥義ヲ開敷ス
ル耳。其言ハ則チ菲俚ノ辭、而シテ其意ハ則チ先師日蓮至忠至誠ノ丹款ナリ矣。
臣等誠恐誠惶、伏シテ願フ。陛下一ビ乙夜ノ御覽ヲ賜ヒ、其言ヲ舍テ而シテ其意
ヲ取リ、以テ先師ノ宿忠ヲ容レタマハンコトヲ。臣等惟ダ死モ是レ命ノマ、ナリ
或ハ謂ハン。皇室ハ佛教ノ事ニ關ラズト。既ニ曰ハズヤ。佛教本邦ノ民ヲ化ス、
即チ是レ本邦ノ佛教ナリト。然バ則チ亦タ是レ奚ゾ。陛下ノ佛教タラザランヤ。
古佛、遠ク法ヲ國王ニ囑シ。先師、久ク大忠ヲ懷テ、而モ未ダ壯望ヲ天聽ニ達

スルニ及バズ。今ヤ千古未曾有ノ大典ニ遭ヒ、叨ニ天威ヲ冒瀆シテ、之ヲ奉上ル。是レ臣等縷々ノ誠、敢テ善言ヲ天聰ニ介シタテマツラント欲スル耳。臣等之ヲ孟軻ニ聞ク、曰ク。舜ノ堯ニ事フル所以ヲ以テ、其君ニ事ヘザル者ハ、其君ヲ敬セザル者ナリト。臣等竊ニ惟フ、先師ノ國ヲ護リ君ヲ佑クル所以ヲ以テ、其國ヲ護リ其君ヲ佑ケザル者ハ、便々其國ヲ愛セズ其君ヲ敬セザル者ナリト。先師、身ヲ死シテ法ヲ弘メ。大義、以テ日本ノ柱石ト作り。大慈、以テ日本ノ眼目ト作ル。未ダ義ニシテ而シテ其君ヲ後ニシ、慈ニシテ而シテ其國ヲ遺ル、者有ザルナリ。故ニ倘シ能ク陛下ノ神聽ヲ此ニ垂レタマフコトヲ得バ、則チ晴明ノ天地ハ、其大ヲ益シ。靈光ノ日月ハ、其輝ヲ増サンコト必セリ矣。臣等亦タ將ニ枯蕘復タ華サキ、朽骨再ビ肌スルノ思アラントス。願ハクハ陛下臣等ガ愚誠ヲ矜ミ、以テ臣等ガ微志ニ聽キタマハンコトナ。臣等犬馬恐懼ノ情ニ勝ズ。謹テ拜疏シ。襲シク兩陛下聖壽萬々歲 正立テ兮國安カラシコト祝シタテマツル臣田中巴之助等誠恐誠惶、頓首頓首。謹テ言ス。

〔奏疏畢〕

謹奉賞刻本書及奏疏譯文。願、正義廣宣、戒壇成就。世清國泰、人善業理。殊願、天皇陛下寶祚延久。皇后陛下仁德遐昌。皇太子殿下文武聰明。又願、同門士女二世安樂。更願

如實院導智日見善男子

〔萬延元年三月十八日命日〕

知見院妙實日如善女人

〔明治二年十二月廿八日命日〕

兩靈位佛道増進、坐寶蓮華。一家歷代本末諸緣、悉皆成佛。

紀仲源右衛門

紀仲梅三郎

紀仲源助

紀仲保三郎

施本功德主

明治二十七年五月十日印刷
明治二十七年五月十六日發行

(非賣品)

訓譯者兼
發行人

田中巴之助

大阪市西區西長堀北通壹丁目
五十五番邸寄留

印刷人

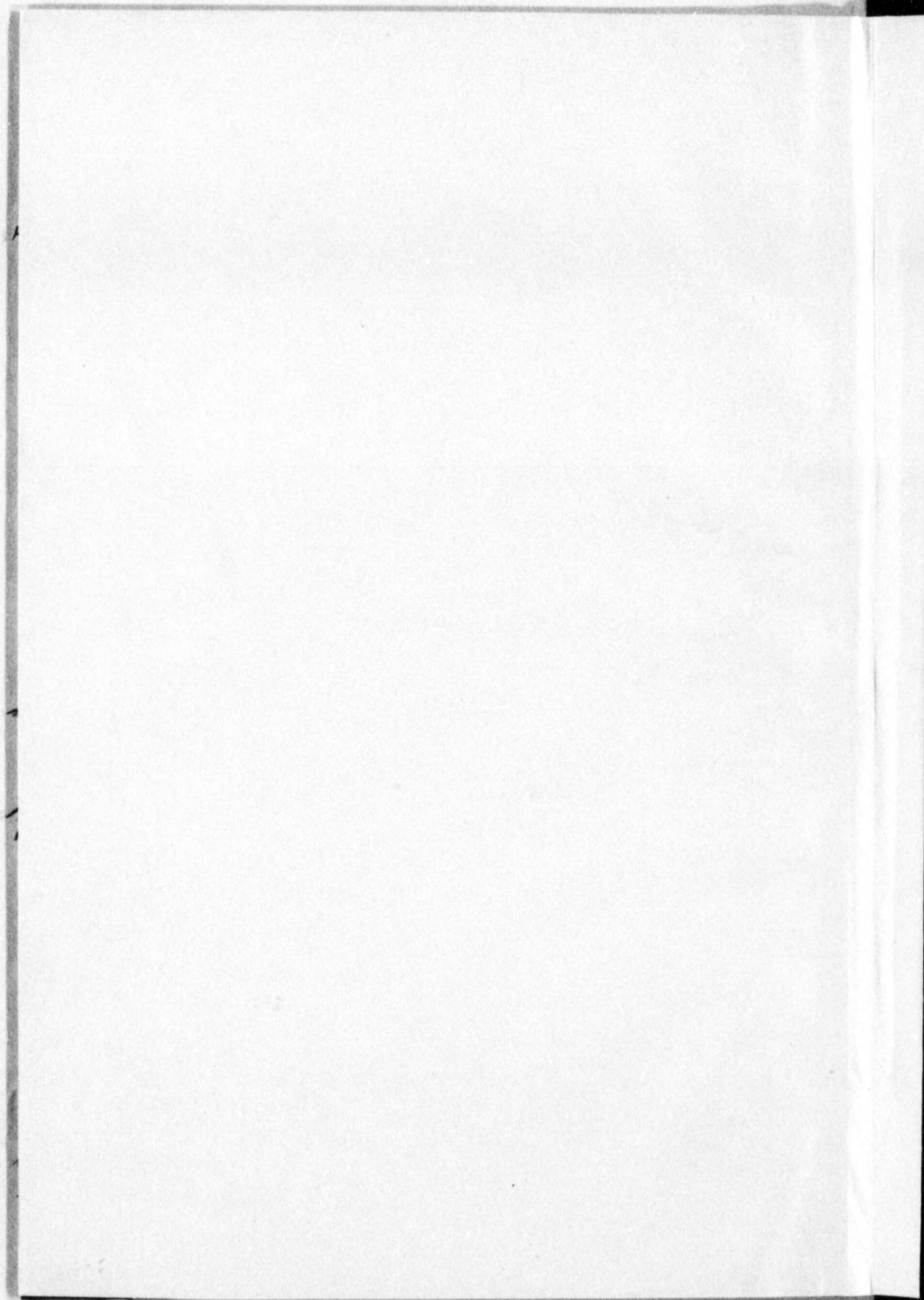
前田菊松

大阪市東區內本町橋詰町
六十八番屋敷周擴社

發行所

立正安國會大阪布教所

大阪市西區西長堀北通壹丁目
五十五番邸



特45

189

立正安国論

国立国会図書館

020190-000-8

特45-189

立正安国論

田中 智学/訳

M27.5

ABH-0405

